平成１８年１２月１日発行

かまにし

第２２号

発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

作詞家　藤田まさと・清水みのる

戦前より、戦中戦後にかけて、矢口の渡には三人の偉大な作詞家が居住していました。その一人、高橋掬太郎は「かまにし17」21号ですでに紹介ずみです。残る二名は「明治一代女」「岸壁の母」「浪花節だよ人生は」等を作詞した藤田まさと氏。「森の水車」「かえり船」「月がとっても青いから」等を作詞した、清水みのる氏です。藤田まさと氏は安方町（現・多摩川一丁目）、清水みのる氏は今泉町（現・矢口二丁目）に住まいがありました、二人はとても仲の良い友人関係であるとともに、ライバル同士でもあったのです。

藤田まさと氏

藤田まさと氏は明治41年、静岡県榛原郡川崎町（現・牧の原市）に生まれ、昭和57年、74歳でこの世を去るまでの半世紀余、人の生き様、人生の浮き沈みといった日本人の心を揺さぶる詩を五線譜に添えてきました。特に「旅笠道中」「妻恋道中」「流転」「大利根月夜」といった股旅・道中物は、まさに藤田作品の真髄であり、江戸情緒をたっぷりと歌いこんだ「明治一代女」、軍国歌謡の代表作「麦と兵隊」、終戦の陰で引上船から降り立つ我が子を待つ、空しい母の姿を歌った「岸壁の母」などは、人の心をとらえて離さない日本人の歌にほかありません。

親友サトウハチロー氏の「リンゴの唄」をきっかけに、大ヒット曲を作っても作家は報われないのは不合理と、著作権問題に真剣に取り組み、日本音楽著作衆組合を結成、著作権法改正に力を注ぎました。昭和44年、紫綬褒章を、昭和53年、勲三等瑞宝章を受章する。

♪波の背の背に　揺られて揺られて、月の潮路の　かえり船

清水みのる氏作詞、「かえり船」の一節です。歌手田畑義夫はこの曲に対しこう回想しています。

「巡業の途中、大阪駅のホームで汽車を待っていたら、そこへ復員列車が入ってきたんです。その列車を迎えるように駅のスピーカーから「かえり船」が流れてきました。出迎えの家族と感激的な対面をしている人や、汽車の窓からそれを見ている人達がみんなポロポロ泣いているんですわ、それを見ていて私はもう胸が一杯で、（略）歌い手になってよかったなと、心の底からしみじみ思いました。」

清水みのる氏は明治36年、静岡県浜松市伊佐地町に生まれ、立教大学卒業後、佐藤惣之助に師事。作曲家、倉若晴生とのコンビによる「○○船」シリーズは十数曲に及びます。三千余の作詞を手がけ、昭和46年、紫綬褒章を受章しています。

清水みのる氏

（取材　都築委員）

ユートピア『吾等が村』
黒沢商店　蒲田工場

「僕の東京地図」
詩人サトウハチロー

門をくぐっておどろいた。左手に工場、右手に野菜畑、桜の並木は、はるかにつづき、コンクリートの道には、ゴミ一つ落ちていない。（略）門のわきからずッと見渡せる畑は、この村民が（本当は社宅の人だが）たがやして、朝のおつけの実にしたり、夜になると牛肉と煮たりする野菜が植えられてあるのだ。（略）ネギ坊主が夏を迎える風に吹かれていた。畑の向うに食堂があり、湯がある。午後の五時からお風呂は、始まるのだ。生垣にとりかこまれた百二十戸の家、どの家も青い木にとりかこまれている。村のはずれに学校がある。（略）学校のわきに、深さ一尺位のプールがある。（略）。夏になると水あそびをするのだ。ここ々に至っては、おどろきの一手より他にない。

黒沢貞次郎

黒沢商店蒲田工場『吾等が村』を建設した黒沢貞次郎は東京室町の出身。明治24年に16歳で単身渡米、ニューヨークのエリオット・ハッチ社（タイプライター会社）に工員として就職。工員として技術を身につけるかたわら、タイプライターの研究をはじめ、明治32年日本語ひらがなタイプライターを開発、さらに電信への利用を前提とした、先進的な新機種に取り組みこれを完成させる。明治34年、10数台のタイプライターと、エリオット・ハッチ社の日本における総代理店権を得て帰国。黒沢商店を設立し、タイプライターの宣伝・販売活動を行い、同時に事務用機器の輸入販売に乗り出す。

近代事務空間としてのオフィスビル建設の構想を抱き、事業のかたわら鉄筋コンクリート技術・建築を独学。明治42年から銀座尾張町二丁目（現銀座六丁目）に従業員を主体に本社ビルの建築を始め、大正元年の暮れに完成させる。

貞次郎は聖書を愛読し、聖句や英詩の一部を英和両国語でロずさむ人物であった。渡米中に見聞したプルマンの鉄道村の印象は、ユートピアとして、貞次郎の眼にやきついていた。それだけに事業の成功は、蒲田の地にユートピアを実現すべく、黒沢村の建設におもむかせた。

本社ビルは戦中の被災は免れたが、戦後昭和21年、米軍に接収され、赤十字社の活動に供された。6年後に接収は解除されたが、元の姿に改修するのに半年余りの時を要した。貞次郎にとっては我が子が帰るような安堵の思いでその姿を見届け、昭和28年1月その生涯を閉じた。

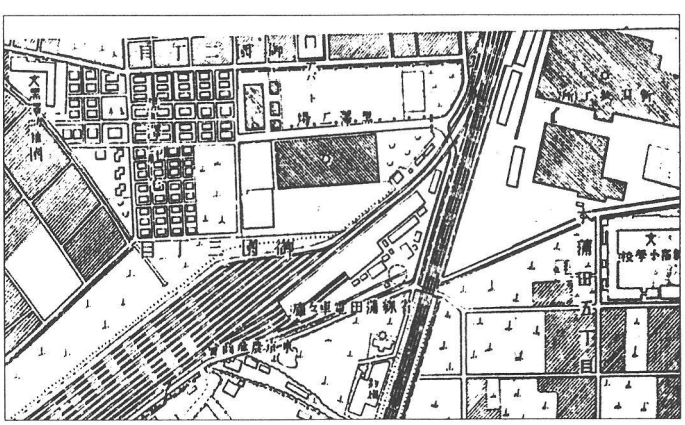
『吾等が村』

荏原郡古川村（現大田区新蒲田一丁目）をめぐる黒沢商店蒲田工場を『吾等が村』という。

大正2年、貞次郎はユートピア『吾等が村』建設を目指して2万余坪の敷地買収と田畑の地盛り作業に実に4年をかけ、自らの設計施工による「鉄・ガラス・コンクリート」の近代的材料を駆使して工場を完成させ、大正7年に創業を開始したが、関東大震災で甚大な被害を受け、工場は崩壊。大正15年再び新工場建設に着手。創業以来10年余の歳月をかけて蒲田の地に理想郷的工場が創り上げられて行く。

この工場の特徴は敷地の中にタイプライター工場の他、社宅を13棟建設し、敷地内には菜園を設け自給し、また、社員の子女の教育のため施設の幼稚園と小学校（昭和5年、私立尋常小学校として認可）さらに食堂、浴場等の建設が進んだ。

しかし、現地の井戸の水質が悪く難渋したため、多摩川の近



悪く難渋したため、多摩川の近くの原村（現多摩川二丁目）に水源を求め、掘り当てた2本の井戸から埋設鉄管を通してポンプ加圧送水し敷地内の貯水槽で受け、さらに高架水槽に上げ、各戸に配水された。良い水を得た『吾等が村』の村民の喜びは大変なものだったようだ。時あたかも大正11年12月25日クリスマスの日で、この上もないプレゼントと感謝された。

また、幼児教育の重要性を認識し、幼稚園、小学校は一貫教育であるべきとの考えに基づき、幼稚園はいち早く大正9年に創立され、二人の保母により一年保育、二年保育に分かれて運営されていた。続いて鉄筋コンクリート2階建て小学校二棟の建設に取りかかった。この内の一棟は小学校の教室専用、別の一棟は教員室、図書館、医務室、クラブ室、講堂で村民の生活相談、生涯教育に使える場所として計画されていた。

しかし、工事半ばで敷地内の多くの施設とともに関東大震災により損壊し工事中止の止むなきに至った。

大正15年、新工場完成の後、改めて別の場所に木造平屋建て校舎が昭和6年完成した。初代の白坂校長には開校の直前、半年にわたる米国欧州の幼児教育の実際を視察旅行する機会が与えられた。学校の黒板、机、椅子等はすべて工場で親たちの手作りであり、さらに、各室に温水暖房の設備が為され、輸入品のピアノ、オルガンも配され、一学級20名以下を定員数と定めた。

70年、80年後の現在になり、やっと日本の教育法が取り沙汰されるなかに、当時、確固たる信念のもとで教育が実践されていた。さらに先生達も『吾等が村』の同じ社宅に生活して村民としての意識、家族意識を育んでいった。

昭和18年国民学校令の施行に強く反対し学校は閉鎖され、児童たちは近くの道塚小学校へ移籍された。残された校舎も昭和20年5月の空襲により焼失した。

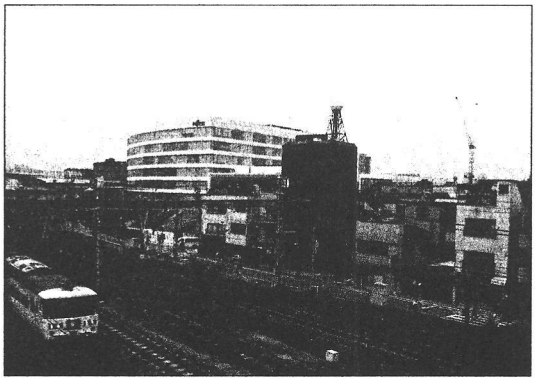
工場は戦時体制下、資材配給の困難を受けながらもテレタイプ、通信用タイプの生産を続行し軍や逓信省の要望に応えた。たまたま広い農園が戦時下の食料不足に大きな手助けとなったのと同時に空襲火災による延焼防止に役にたち、工場は被災を免れた。

終戦後は壊滅状態に陥った通信施設の復旧に対応するための努力が重ねられたが、モーター等の他工場からの製品の補給に難渋した。昭和31年に富士通信機株式会社との合併会社を設立したのを契機に、黒沢商店は発祥地の銀座に本拠を移すことになった。

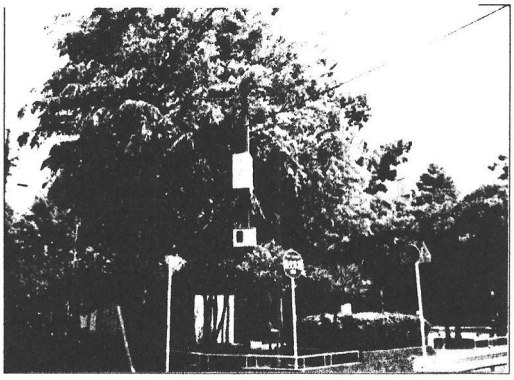
黒沢貞次郎のコミュニティ工場経営の思想は、渡米中に得た先進工場都市のイメージや、大正デモクラシー時代に注目を集めていた白樺派の「新しき村」などの影響もあると思われる。

現在の新蒲田一丁目の全区域にまたがっていた『吾等が村』は「富士通」新工場のほか大田区民センター、新蒲田公園、JR東日本職員住宅をはじめ、いま大規模マンション群に変貌しつつある。

『吾等が村』の名残として欅（ケヤキ）の木が唯一昔と変わらず新蒲田公園で今も元気に頑張っている。



現在の新蒲田一丁目。富士通の場所に工場があった



（取材　石渡、柏村、都築委員）

昨年の6月初旬に、本場のサ

投稿記事
蕎麦とラーメン

クランボを友人に進呈しようと、妻と寒河江に向かった。

東京駅を午前7時30分発、山形着午前10時19分のつばさ103号で山形へ向かった。

現役時代は現場の査察で米沢、青森の深浦と福島から栗子山（1217m）へスイッチバックで何回通ったことだろう。

今は山の西側トンネルと緑したたる山間を米沢へ向かう。10時19分山形駅着、10時40分左沢線で寒河江へ、車窓の左側に点々と立つサクランボの木々は、青々としているが、赤い実は見当たらない。11時25分寒河江到着、早速お目当ての公民館脇の販売店へ行くが戸が閉まって人影もない。

仕方なく駅のそばの売店のおばさんに聞くと、今日は日曜であり、また今年は気候が寒くて露地物は月の半ば過ぎないと店には出ないとのことである。

山形へ戻るには、まだ時間があるので、駅前のタクシーで慈恩寺まで見学に行くことにしました。

法相宗慈恩寺は、摂関家藤原氏の荘園地であったため、京文化が直接に入って、仏像は重文の阿弥陀如来を始め、30体を数える。現在重文の本堂を始め、数多い優れた国・県・市指定の文化財を擁して、古代文化の聖地として、再生の道を歩んでいる。

約束の一時間が来たので、迎えのタクシーで寒河江駅へ送ってもらう。

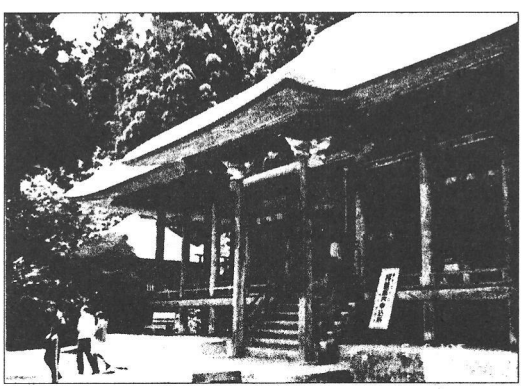
山形へ帰るにはまだ時間があるので、運転手さんに蕎麦屋を紹介してもらう。駅から15分位の所に創業江戸時代、五代目そば処「平左衛門」へ入った。へぎそば（三人前山菜小鉢付1650円）は少し黒く香りの高い蕎麦を注文した。噛み応えのある蕎麦を食べていると、入ってくる客はなぜかラーメンばかり注文する。妻にあと15分で発車ですよと言われ、あわてて蕎麦を食べるのを止め、勘定もそこそこに駅へ向かった。やっと間に合って、山形へ向かう。市内の見学も最上家三代の墓と他三ヶ所でホテルへ入った。

ホテルの従業員に寒河江のラーメンの事を聞くと、寒河江は東北で一番早く、ラーメンの流行したところだとのことだった。機会があったら、今度はラーメンを食べに来ようと考えた。

翌日は米沢の市内見学をし夕方に白布温泉の東屋に宿泊、一晩中カジカの鳴き声と付き合いながら夜を明かした。

結局友人への土産は、サクランボではなく、米沢の煮鯉と東光酒蔵の酒に化けてしまった。

（ペンネーム　伴　太三）



慈恩堂

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，538人
	女	27，111人
	計	56，649人
世帯		29，755世帯

平成18年11月1日現在

編集後記

わがまちの顔では、前号に引き続き、偉大なる作詞家、藤田まさとさんと清水みのるさんを取り上げました。こうして取材してみると、蒲田西地区には本当に芸術家が多いことに驚かされます。

特集では、「黒沢商店　吾等が村」を取り上げました。取材をすればするほど、黒沢貞次郎さんの先見性、行動力、信念には驚嘆を感じました。現在の大企業でも真似のできないような福利厚生、しっかりとした教育論。大田区だけでなく、日本が誇れる田園都市。まさにユートピアが蒲田西地区にありました。今回、ご紹介できたのは『吾等が村』のほんの一部です。かまにし17がきっかけとなって、吾等が村の事を皆さんに知ってほしいと思います。

読者投稿は引き続き、募集中です。ドンドン、お送りください。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五